

高等教育への進学を志向しない移民第二世代男性たち —— 横浜市鶴見区のブラジル系コミュニティのジェンダー化された構造に着目して ——

一橋大学大学院／日本学術振興会特別研究員 DC1 藤浪海

1. 目的

横浜市鶴見区のブラジル系移民コミュニティでは、高等教育への進学を志向する女性第二世代が多いのに対し、男性の場合は高等教育への進学者が極端に少ない。なぜジェンダー間でこのような進路選択の傾向の差異が生じるのであろうか。

日本の移民第二世代の先行研究では、教育制度の排他性や就労の不安定な状況に焦点を当てるマクロな観点からの研究や（たとえば山野上 2015）、「家族の物語」や教育戦略など移民のエージェンシーに着目するミクロな観点からの研究が蓄積されてきた（たとえば志水ほか 2013）。しかしこれらの観点からはこのコミュニティにおけるジェンダー間の差異については説明しきれない。

そこで本報告では、移民ネットワーク論において重視されるコミュニティというメゾの水準、とりわけそのジェンダーをめぐる構造に着目し、移民第二世代の進路がどのような文脈のなかで規定されるのかを、特に高等教育への進学を志向しない男性第二世代の事例を中心に検討する。

2. 方法

報告者が 2013 年から実施してきた第二世代の学習教室での参与観察データと第一世代のインタビューデータを用い、コミュニティのジェンダーをめぐる構造とそのもとでの親から子どもへの働きかけのあり様、第二世代自身の進路意識を析出する。

3. 結果

鶴見では男性には自営電設業というエスニックな労働市場が存在し、それを生業とする父親たちは息子に現場で仕事の「見学」をさせたり、あるいは日常の会話の中で電設会社を継ぐことを示唆したりしている。そうしたなかで第二世代男性は電設業で得られる技術や賃金に魅力を感じ、もともと苦手な学校での学習への疑問を抱くようになり、高校卒業後の電設会社への就労を志向するようになっていた。

それに対して母親のなかには子どもの大学進学を望んでいるものも多かった。しかし工場の非正規労働者として働く彼女らは、就労先の少なさゆえに工場の都合に合わせ就労時間を延ばさなければならなかったり、夫婦間の収入をめぐる「競争」が発生したりするなどして、時間的な制約に直面せざるを得ない。また高等教育をめぐるのは初等・中等教育とは異なり制度も複雑で、多言語による情報も限られている。その結果子どもの進路選択に関して積極的な働きかけを行うことが困難になり、「進学してほしいけど、でも仕方がないから」という諦めへとつながっていた。

4. 結論

従来マクロ／ミクロな視点からの研究が蓄積されてきたが、移民ネットワーク論からいえば、いかに移動がなされ、その結果いかなるコミュニティが形成されたのかが、その居住のあり様に強く影響する。実際に鶴見の事例からはコミュニティのジェンダー化された構造が、第二世代の進路選択に強く影響していることが示された。今後、集団間比較のみならず集団内での比較研究を進めることによって、移民コミュニティと第二世代の関係をより精緻に行っていく必要がある。

【参考文献】

志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛冶致・ハヤシザキカズヒコ編、2013、『「往還する人々」の教育戦略』明石書店。

山野上麻衣、2015、「ニューカマー外国人の子どもたちをめぐる環境の変遷」『実践と研究』7: 117-141.